不思議な独白

番才は戸惑った。

「そんな・・・。」

どちらに対しての反応なのかをはっきりとさせていないからか、女将も名取もその反応を受けることも拾うこともせず何かを考えている。

「それは本当なんですか？」

同じ過ちを繰り返し、またしても会話は生まれなかった。番才は今自分がいる空間を見渡すように周囲に目を配り頭を掻く。何が現実で何が空想で、今自分が捉えられていると思っている感覚すらも信じられなくなり始めていた。

「全員がそういう状況というわけじゃないよ。」

番才のあまりの動揺を見かねて、女将が優しく片方の質問に返事を返した。

「ですが、利他さんはっ！」

「それも確定してるわけじゃないさ。たださっきの利他の発言を聞いて、もしかしたらって思っていたことが現実味をましたってだけ」

名取がさらに補足を入れる。

「まさか利他さんが・・話せなくなっているだなんて、そんなこと想像も・・・」

「そっ。誰もそこまで想像しながら人と接したりなんかしないって。わたし達がそれに気付けたのも偶然なんだから、あんたがそんなに罪悪感持つことないよ。」

「ですが・・・」

「むしろあんたが後先考えず動いてくれたお陰で可能性に気づけたんだ。自分のそのお節介もたまには役に立つって褒めてあげなよ。」

名取は先ほどまでの暗い表情も悲壮感も消し去り普段通りに戻っている。

「それに、名取さんも同じ状態だということは・・・」とそこまで言うと名取の表情はまた違う感情を浮かべた。

「わたしのことは今はどうでもいいだろう。

時期が来たら話してあげるさ。」

伏せた顔を上げるとまた元に戻っていた。これ以上踏み込むことは何も生まないと理解した番才は、小さく頷くことで了解を示す。

「ここには現実の病気や傷といった身体的な症状は反映されない。そして利他は恐らく現実では何かしらの理由で声が出ないんじゃないかということさ。今はそれだけ理解できてればいい。」

「はい。」と返事をしたが頭では理解できていても心がアレルギーのように反発する。利他に向けて自分が放った言葉が脳内で増殖を繰り返し、容量を超えて溢れた文字が全身の皮膚の上を走り回り、番才は強い力で顔を掻き叩いた。

「さて、これからどうするかだが・・番才、あんたは部屋に戻って一度休みな。」

「えっ！？」

「そうだね。そうした方がいいよ。」

「いえ・・・大丈夫です。」

目の前に立つ二人が憎らしかった。何も言わずこちらを見つめる瞳が。二人の慈悲や深みや頼り気が。自分の至らなさに気付かされる。

見たくないとそっと隠している部分に光が注いでしまう。憧れは嫉妬に、感謝は情念へと姿を変える。それを必死に止めようとする自分の情けなさに。

「・・・わかりました。色々と、」

「ありがとね。」

何もかも見透かされているのだと諦めそうになる。自分の意思とは何なのかを疑いそうになる。番才は軽く頭を下げ、食い縛る表情を見せぬように自室へと戻っていった。

「雨ノさん。」

「うぇっ！あっ、はい。何でしょうか？」

過剰な反応が少し煩わしく感じる。隣に座る雫は病院の待合室みたいに綺麗に脚を閉じ膝の上に手を添え、こちらではなく正面の空間に声を発している。既に痛みがなくなっていい

る脚を組み、利他も雫に倣い会話は正面の空間と行う。

「ありがとう。それだけ。」

「あっ、いえ、よかったです・・・その、わたしはただ、お水を、持ってきただけなん、ですけど。」

「そのお水がなかったらおれはまだ傷だらけのままだったんですけど。」

「えっ、あっ、そう・・です、よね。あの、はい。」

会話にならないことに心の中で面倒を感じつつも、その状態で自分を助けてくれたことにそれ以上の感謝を感じていた。

「おれさ、ここに来てまだ日が浅かった頃に、森の中に入って慌てて出て来た時に思いっきりすっ転んで、今日より酷いくらいの怪我してさ。その後も何回かこの水にお世話になってんだよね。」

「そう・・・だったんですか。」

「ほんとここって何なんだろうね。不思議な

場所だよな。」

「そうですね。」

それからまた少し沈黙が続いた。風が奏でる音しかないこの場所では、人の言葉や吐息の中に含まれている本来は意識しないと捉えることのできない真意や本音がよく聞こえているのかもしれない。雫の（会話が続かなくて申し訳ない。）という気持ちや、それに対する必死さが伝わってくる。利他はおかしな居心地の良さを感じ、それに付随する黒い塊に不快感を覚えた。

「雨ノさんってさ、何でここに来たの？」

「えっあっ、それは・・・。」

「いや、悪いごめん。」

居心地の良さに甘えて配慮を欠いていたことにすぐに気づく。

「誰も望んでこんなとこ来ないよな。おれだってこんな質問されたら嫌だわ。悪い忘れて」

「いえ・・・すいません。」

（おれもあいつと同じことをしてるじゃねえ

か）と利他は大きく嘆息する。つい今しがた目の敵にしてきたばかりの男が過ぎり、自分の発言が自分に返ってくる。

「雨ノさんって、あいつ・・・何だっけ、あの、天下・・なんちゃら。」

「番才様、ですか？」

「そうそう番才、てか番才〝様〟？なにあいつそんな呼び方させてんの？」

「ああいえ、違うんですっ！」

「えっ、じゃあ実は偉い人だったり？」

「いえ、あの・・・その、わっ、わたしが勝手にそう呼んでるだけなんです。ご本人はやめて下さいと嫌がってますけど。」

「・・・なんでそんな呼び方を？」

空間と会話をしているため姿は見ていないが、身体の力が抜けたこと、優しい顔になっているであろうことが話し方に現れた。

「わたしを・・・救ってくださったからです。」

全貌がイマイチわからない利他は続きを待つ

ことしかできない。しかし雫はその先を話す素振りを見せず、利他は（まあ、そうだろうな）と納得して別の質問をする。

「番才って人は何者なの？」

「・・・すいません。わっ、わたしもよく、わかってないんです。」

「ふーん、そうなんだ。（それなのに救われたってどういうこと？）人の事情に首突っ込まずにはいられないただのお節介野郎なのかな。」

「そっ、そんな言い方は・・・あの・・・」

「ああ・・・そうだよ、そうだよな悪い。こにいるんだもんな。そりゃ何か抱えてるに決まってるよな。」

両手で顔を覆う。番才について話す度に自分が小さいことを痛感させられる。（でも、）と自分を擁護する弁明が浮かぶとその気持ちはさらに大きくなった。

「その・・・お節介に救われる人も、いっ、いると、思います。」

利他は覆った右手の人差し指と中指の間から雫を見た。

「わっ、わたしは・・こ、ここに来た時、ひとり、独りぼっちだと思ってました。自分には・・・その、あ、あの、生きる・・価値が、生きていてもって。」

必死に話す彼女を見つめ続けるのは失礼だと感じ、利他は目を伏せ両手を同じように脚の上で組んだ。

「けどっ、ば、番才様はっ、わたしを、ちゃんと・・・わたしを、見て・・・。こんな風になっちゃったわたしとお話がしたいと言ってくださったんです！わっ、わたしは・・感謝して、るんです。」

「・・・おれさっ！」

雫は顔を上げて利他を見た。

「今はこうしてちゃんと喋れてるけど、ここに来る前は何も話せなくなってたんだ。」

少しだけ上ずる声が、今から話してくれる内容の辛さや悲しみを伝えてくる。

「小さい頃からずっと友達だった親友を、裏切って亡くしちゃったショックで・・・。こうなる前までおれ歌を歌ってたんだぜ。おれとそいつの子供の頃からの約束を果たすために。」

歯を食いしばる表情を見られたくないと明後日の方向を向く。

「代償だと言い聞かせてたけど、なんてことない。足りなかったんだよ単純にこれだけじゃ。声を失うだけじゃ償いきれないってことに気づいて、だからさっ！おれは・・・、自分に何ができるかって・・・。」

右の太ももに感じる掌の温度に温められ。それを冷ますように大粒の涙がこぼれ落ちた。

〜続く〜